令和6年度(2024)第2回出雲市総合教育会議 会議録

令和6年(2024)12月24日(木)午後3時30分、令和6年度(2024)第2回出雲市総合教育会議を出雲市役所3階庁議室に招集した。

次第

- I 市長あいさつ
- II 教育に関する諸課題について
『学力向上「たつじんテスト」』
- III 教育長あいさつ

出席者名簿

出雲市総合教育会議

市 長	飯 塚 俊 之
教 育 長	杉 谷 学
委 員	高 橋 詠
委 員	川 田 量 子
委 員	奥 康 人
委 員	布 野 和 弘
副市長(オブザーバー)	伊 藤 功

教育部

副 教 育 長	金 築 健 志
教育部次長(児童生徒支援課長)	山 崎 創
教育部次長(学校教育課長)	矢 田 和 則
教育政策課 課長	栗 原 真 奈 美
学校教育課 主査	岩 崎 慎 一
学校教育課 課長補佐	園 山 正 樹
学校教育課 係長	河 原 史 博
児童生徒支援課 課長補佐	小 林 剛
教育政策課 主査(書記)	池 尻 精 二

市立学校

出雲市立朝陽小学校 校長	山 本 芳 正

(栗原教育政策課長)ただいまから、令和6年度第2回総合教育会議を開会いたします。開会にあたりまして、飯塚市長がごあいさつ申し上げます。

I 市長あいさつ

(飯塚市長)本日は、令和6年度第2回出雲市総合教育会議を開催いたしましたところ、委員の皆様には、定例会の後引き続き、ご出席いただき、厚くお礼申し上げます。

みなさまもご承知のとおり、この総合教育会議は、本市の教育の課題や、あるべき姿について、市長である私と教育委員会が情報を共有し、意思統一をする場でございます。

昨年度は、「不登校対策」を議題とし、この会議での意見を踏まえ、「出雲市不登校対策指針」を策定することができました。また、6月の会議においては、「学校の働き方改革について」、塩冶小学校の岡崎校長や第三中学校の兒玉校長をお招きして、学校現場の声をお伺いするとともに、議論をすることができました。その後、教育委員会では、取組を引き続き進められているところでございます。その後、教育委員会では、取組を引き続き進められているところでございます。教員のみならず、児童生徒のためにも、教員の働き方改革にしっかりと取り組んでいくことが必要なことであると考えております。

さて、本市の教育振興計画の目標の一つには「生きる力」の育成という項目がございます。その中には、「確かな学力の定着と向上」も含まれております。本日は、子どもたちの「学力向上」をテーマとさせていただきます。

来年度から、島根県において、導入が予定されている「たつじんテスト」の実際の取組について学校現場からお話を伺うため、朝陽小学校の山本校長にお越しいただいております。山本校長どうかよろしくお願いたします。

本日は、みなさま方と本市の児童生徒たちの学力向上を図るための方策として、忌憚のない意見交換ができればと考えております。

限られた時間ではありますが、よろしくお願いたします。

(栗原教育政策課長) それでは早速ですが、協議に入ります。お手元にお配りしております、資料「出雲市総合教育会議設置要綱」をご覧ください。この総合教育会議の目的につきましては、記載のとおり、資料の設置要綱第2条第2号にあります「出雲市の教育を行うための諸条件の整備その他の地域の実情に応じた教育、学術及び文化の振興を図るため重点的に講ずべき施策」として『学力向上』について、協議や意見交換をしていただく予定としております。それでは、設置要綱第4条第1項の規定によりまして、市長が議長となり進行を行うこととなっております。これからは市長に進行をお願いいたします。

II 協議事項

◎教育に関する諸課題について

(1) 協議事項◎『学力向上「たつじんテスト」』

(飯塚市長) それでは、よろしくお願いたします。それではさっそく、II 協議事項に入ります。協議事項◎教育を取り巻く諸課題についてということで、今回は、『学力向上』をテーマにさせていただきます。まず担当課からお願いたします。

(矢田教育部次長) (資料を用いて説明・たつじんテストのデモ版の体験)

(河原学校教育課係長) (資料を用いて説明)

(山本朝陽小学校校長) (資料を用いて説明)

(飯塚市長) ありがとうございました。それでは、デモ体験も含めて、全体的なたつじんテストの話、先ほどの山本校長先生のお話もお伺いして、一括して、ご意見いただければと思います。高橋委員。

(高橋委員) 山本校長ありがとうございました。率直に、どの学校もやったらいいのではないかなというふうに思われますか。学校もやはりいろいろその状況があると思うのですが、やるとなれば、出雲市挙げてやったほうがいいのではないかと思うのです。その学校の状況ですとか、児童生徒の数とかも違ってきますけれども、これはもう絶対にやった方がいいよ、進めようということですね。

(飯塚市長) 山本校長。

(山本朝陽小学校校長) うちの学校は、やってよかったです。さきほど言ったようにこのテストについての情報提供、説明とか、活用のあり方、そういうものがきちんと伝わらないと難しい学校もあるかもしれません。最初が肝心かなと思います。学校でやったからには活用したい。これをどんな風に活用するのか。どう分析するのか。丸投げされると学校は困る。そこを丁寧にされるといいかなと思います。

(飯塚市長) 方針としては、来年全校するのですね。

(矢田教育部次長) 今、県の方で示されているのは全県すると言う方向です。そのやり方については各市町村の判断に委ねるということでございます。出雲市としても、そういったご意見をいろいろききながらですね検討している段階でございます。

(飯塚市長) 布野委員。

(布野委員) 今までの学力テストと、この新たなテストと、先生方に掛かる時間とか負担は、今までそんなに変わらないのですか。たつじんテストの方は初めての導入で、先生方も時間を要したとかいうことであれば、その辺もどうかと思うのですが。

(飯塚市長) 山本校長お願いします。

(山本朝陽小学校校長) これは、簡単にできます。簡単というのには語弊があります。今の

全国学調は紙で届き、枚数を数えて配り、回答が終わったら回収を繰り返しています。作業自体を言えば、たつじんテストが楽です。

(杉谷教育長)市の学調も同じことが言えます。紙でやりとりしています。

(飯塚市長)川田委員。

(川田委員)分析等は全部、学校の方がするのでしょうか。その結果を踏まえて、分析したり、それをどう生かしたりというのは全部学校で、何かアドバイスの的なものがあるのか。どうなのでしょう。

(飯塚市長)どうぞ。

(河原学校教育課係長)基本的には、児童一人一人の結果というのは学校に返されます。先生方で個別に見ながらこの子はこういった問題でつまずいているとか、全体的にここら辺が難しそうだとか、そういう分析をしていただきます。県の方も、計画的に研修を企画しておりました。今年度につきましても、実際、今井むつみ先生の方に来県いただいて、このたつじんテストの効果であるとか、見方について説明を受けました。同様のことが想定できると思います。

(飯塚市長)高橋委員。

(高橋委員)広島で始まっているということで、広島はもう全体的にやっているテストでよろしかったのでしょうか。広島の子の学力向上に繋がっているかどうかというのがすごく知りたいところです。これをする意義というのは、やはりつまずきから学習意欲を向上させるっていうところだと思います。やっているだけというのは、先ほど山本校長先生から意味がないということもあったので、そのつまずきから学力が向上していつている、広島の子の現状があるのか、そういうことはわかりますか。

(飯塚市長)どうぞ。

(河原学校教育課係長)数字的な結果としては、十分把握はしておりません。けれども、広島県のまとめの中では、各学校の実践、たつじんテストの結果をもとにして、授業改善を實際なされていると。そういったところで、子どもたちの大きな意味での学力という見方であるとか、言葉の理解であるとか、そういうことについて、実績が挙がっているという

理解をしております。

(矢田教育部次長) 広島の方も、今井先生が外国語指導に係るテキストを作ろうということで、どこかやってくれるところがないかなど、広島の方に提案されたら、これは外国人向けよりも、日本の今の児童生徒にも活用できるのではないかということで、これが開発されたのが2018年くらいです。そのときは、福山市も加わって、少しずつ、まずは最初に200人とか千人とか少しずつ実験をしながら、現在2024年ですけれども、どんどん広がってきて県下の方では、学力テストをやめて、そういった取り組み、手引書をしっかりつくり、それを各学校に示しながら広げていくってことです。そういった意味では、それが学力に繋がるという取組みをどんどん進めていращやるとい状況でございます。

(飯塚市長) 奥委員。

(奥委員) 推進をしていくと考えたときに今の出雲市の現状を見ましたら、やはり外国の方々もいращやるとい思ふのです。そういった場合に、たつじんテストを使う、日本語を習得するにあたって、そういったものが適しているかどうかといところはちょっと気になるところです。

(飯塚市長) 杉谷教育長。

(杉谷教育長) 教育委員さんの研修会を10月にさせていただいたときにも今井先生、お出でになって、このたつじんテストについてお話いただいたのです。そのあと意見交換する時間があって、市内の外国籍の子どもたちがこいう状況にあるので、その子たちにもこれが使えるといるか、外国籍の子がこれをやって、学力の基盤がわかるのですかと質問したら、それはわからないでしょうと。あくまで、これは日本の子たちの生活といるか文化の中で作り上げた、たつじんテストなのでたつじんテストをブラジルの生活とか文化に基づいたもので作らないと測れないでしょうといことをおっしゃったのです。その後、本市には、外国籍の子はいるのですけれど、ほとんどがブラジルルーツだといことで、それであればポルトガル語版を作りませんかとい提案をいただいたのです。非常に限られたルーツの子たちがいるので、アセスメントがしやすいと。サンプルとして改善がしやすいといことで、この出雲市でそれを作ってみませんかといこともご提案いただいて、私どもとしては非常にありがたいなといふうに思っております。体験いただいた日本語版の活字テストを単純にポルトガル語に訳したものでやってみるとい方法を一段階目。そこで得られたデータをもとに、作り変える。特に日本固有のものとか出てくるころについて、変えていかないといけないだろうといことをおっしゃっていました。ブラジルの文化に合わせた習慣とか、こいうものにどんどんアップデートしていつて最終

版を完成させたいという思いをお持ちです。そこまでやっていただけるのなら、私どもとしては、子どもの基盤を測るのに、非常に有効なものになるのかなと。たつじんテストについて、多言語版はないそうなので、もしかしたら、出雲市が協力して作ることで、他の県、全国的な学校への普及も図るものができるのかなと。私どもと他市の両方にメリットがあるようなものができればいいなと思っています。たつじんテストをするにつけては、ぜひ、そういう、外国ルーツの方でアセスメントが取れるような、そういうものを合わせてやっていきたいと思っております。すぐにはできませんけれど、少し時間かかると思うのですけれど、ぜひ、そういうご提案いただいている最中ですので、協力したいと思っております。おっしゃるように、たぶんこのままやらしても測れない。そう先生も言われるし、私が思っても難しいのだろうなと思います。

(飯塚市長) 奥委員。

(奥委員) 今、お話を伺って、山本校長もおっしゃったのですが、これは物差しというか、結局どういうふう子どもたちに接したり、それから話を仕向けたりしていくかというところが一番ではないかと思えます。隣県の広島県が先駆者というかその取組みをされてらっしゃるところがあります。近いですから、そういったところに行って情報を持って帰ってこない、スタートができないだろうなというふうに思えます。教育長がおっしゃった出雲市としての新しい取組みが必要だと思えます。島根県がやると言っているのはいいのですけれど、相当覚悟を持ってやらないと。いつも言いますが、市民の方々にたつじんテストと言ったときに、「何ですかそれは」と言われたら駄目だと思います。市民の方に背中を押してもらって、やるというような形でないといけないと思えます。朝陽小学校については、広報誌とか、地域の理解があって初めてできているということもお話をさしていただきました。そういった意味では、相当覚悟を持ってやらなきゃいけない、できないだろうと思えます。

(飯塚市長) 最初の部分は、またいろいろと時間がかかるかもしれませんが、いろんな提案を見て、我々に取り入れることができることは、しっかりとやっていければというふうに思えます。PR活動等、市民の理解を得て、しっかりと取り組んでいくということは間違いないのだろうなと思えます。そういうことも含めて、ご意見をいただければ、今の段階で懸念されることとか。杉谷教育長。

(杉谷教育長) 先ほど奥委員からのご質疑で2つ目の点は、本当に大丈夫と思っておりますし、今回、希望で取り組まれた朝陽小学校が丁寧に広報等で地域の方、保護者の方に情報を発信しながら、これが子どもたちの学力を向上させていく一つのいいツールになっていることを理解していただいているので、うまく進められてきているのではないかっていうご指

摘だったと思うのです。それを市内全部しっかりPR説明していかなければいけないのかなと思います。あまり聞きなれない「たつじんテスト」というのは、見方を変えると高度なテストを受けるのかみたいな印象にも、言葉からとられてしまう可能性がある訳です。一つ間違えると、能力の高い子だけを対象にして伸ばすためのテストなのかと思われてもいけません。何のために、これをやって、どうするのかということ、おっしゃることが本当にそうだなと思って聞いていました。

(飯塚市長)川田委員。

(川田委員)今、おっしゃった通りの印象を受けました。「たつじんテスト」というネーミングは、何とかならないのかなと思った1人です。子どもたちからすると、またテストという感じもするし、保護者からすると、さらに負担が掛かるのかみたいな感じや印象を受けるので、ネーミングを変えられないのかなと気もするのですけれど。わかりにくいなと思います。ネーミングと言うのは、大事だと思います。いいテストだと思いますし、今井先生の本を読ませていただいて、こういうところをつまずいている子たちは、やっぱり圧倒的に体験が足りないのだなと思います。それを埋めるために、こういうテストがあると思うので、それはいいことだと思うのです。言われたように、持って行き方が大事ですし、本当に抵抗感をなくすのも大事だなという気がしました。

(飯塚市長)ネーミングは変えられるものですか。

(杉谷教育長)ネーミングライツは、今井先生にあります。なかなか、出雲市は何とかに変更しますと言うことは、難しいのではないかなと思います。

(飯塚市長)私は、「太鼓の達人」のたつじんで、それでとっかかりやすいのかなと思っていました。「太鼓の達人」があるので、子どもの頃からやっているの、そっちのイメージで達人ってされたのかなと私は思っていました。同じネーミングで見方が違うということで、それも面白いというか、興味深いなと思っていました。高橋委員。

(高橋委員)このたつじんテストで、子どものつまずき、一人一人のつまずきを学校の先生に知っていただけるというのは本当に保護者としても非常にうれしいことです。そのつまずきから授業がわからなくなって、不登校に繋がっていくということ、その流れがあると思うのです。山本校長も言っておられたように、この子はどこかでつまずいているのだとか、こういう力が欠けているとか読解力がないのかとわかっているのが、これでデータ化されてやっぱりそうだったのだと。つまずきを知ってもらえて、勉強をやっていくと、できるとやっぱりうれしかったり、楽しくなったり、そういう経験と自分もあると思うの

です。つまりいてしまうと、もうそこから先に進めなくなってしまうと、学校が面白くないな、授業つまらないな、話を聞いていてもなんかな、みたいな。あと言葉も、学校だけがじゃないと思うのです。家庭に帰って、いろいろな話をしていく中で、子どもが何か違う言葉を使っているなっていう、親がその言葉の使い方は違うよって、直していくこともあると思うのです。今は、なかなかしっかり子どもと会話するということが少なくなってきた中で、子どもがどんな言葉を使っているのかっていうの知らない保護者さんがたくさんいると思います。今は、いろいろな情報が入るので、そんな言葉使うのみたいな、汚い言葉とかもたくさん使っている小学生もたくさんいます。もう間違っていない言葉であればいいのですが間違っているというのもあるので、読み取る力もそうですし、言葉を使う力もそうですし、学校と本人と家庭とが一体となって、やはりこのつまずきに対して何か不動産管理とかたつじんテスト、本屋さんと一緒にやってみるのも、理解をもらえることの1つではないかと思ったり、先生方や学校や保護者に自分の子どもたちのつまずきを知ってもらってというのは本当に、こちらとしては本当にうれしいことかなと思うので、ぜひ進めていっていただきたいなと思ったり。

(飯塚市長) 親のみなさんにわかってもらうということが、非常にいい視点だなと思って聞かせていただきました。学力調査のものを持って帰りますけれど、なかなか自分で教えられないところもあつたりします。このたつじんテストだったら一緒にやってみようかなっていうこと、取っかかりの間口としては入りやすい。さきほどおっしゃるような観点だなと思ったりして、そういうのが大切なことだと思わせていただきました。伊藤副市長いかがですか。

(伊藤副市長) 広島県は、たつじんテストをいつからやっているのですか。何回、実績があるのですか。

(矢田教育部次長) 今井先生が持ち掛けられたのが2017年ぐらいで、2019年の1月から第1回が始まって、そのときは3校200人からスタートしました。広島で対象校が3校から始まって、そのあと福山市が加わっていわゆる試行実験みたいなところなんです。両方でやりながら、今現在何校まで広がっているか詳細データはないです。

(飯塚市長) 伊藤副市長。

(伊藤副市長) 広島県も全県的にやっているわけじゃないのですね。何でこんなことを言うかということ、山本校長がお話になった中の最後の方に、行政からの効果的な支援とか学校への説明、情報提供が必要だとおっしゃっているので、そういう蓄積があるのかどうなのかちょっと知りたかったのです。導入するにあたって、問いが出てきたときに、それを返

してあげるだけの広島県に過去の蓄積があるのかと思って聞きました。まだそこまでないのでですか。

(飯塚市長) どうぞ。

(矢田教育部次長) 別の資料を見ますと、平成30年度から令和2年度にかけて段階的に進めて、今、現在県内20の小学校フォローアップ校と指定して、まだ開発を進めている状況のようです。

(飯塚市長) 伊藤副市長。

(伊藤副市長) それともう一つですが、分数の大小の問題で3分の1ぐらいしか正答しなかったということでした。教える側としては、ショックだったのですか。教え方に問題があるのではないかと素朴に思いますけれども、そういう反省がまずあると思います。子どもの知識というよりも、もしかしたら教え方がまずかったのではないかというような反省はあったのですか。

(飯塚市長) 山本校長。

(山本朝陽小学校校長) 結果を見てショックです。3分の1の方が大きいと答えるとすれば、数の概念が十分に身に付いていなかったのではないかと思います。どんなふうに指導したのなら、この課題を解決することになったのかということは見直す必要があるかなど。もっと具体のものを使えばよかったのかとか、もっと日常生活との関連を意識させればよかったのかと。そこは反省すべき点だと思います。

(飯塚市長) 杉谷教育長。

(杉谷教育長) 広島は、何かガイドブックを作っていると思うので、やってきたものの蓄積によって、こういうふうな指導とか授業にすることの資料は、提供されている、公開されているので、それらを私らも使わない手はないのです。それだけでは、行う意味がなくて、やはり島根の、出雲のつまずきとか、その原因になっているところをどう解消していくかということは、しっかり作り上げていかなければいけないことだと思っています。今回、これを県が行うということになれば、当然県教委は頑張らなきゃいけないはずであって、やってもらわなきゃいけないという思いもあります。ただし、市としてもするのであれば、市も県に任せようではなくて、島根県と取り組むのだけれども、出雲が先進地になってでもやっていきますよと、外国語、多言語版もそうですけれども、そのぐらいの意

気込みでやらなければ、なかなか成果が挙がらないと思っています。2年生から上の学年での対象となっています。山本校長、実際に行ってみて、この学年ぐらいと何か思われる学年がありますか。

(飯塚市長) 山本校長。

(山本朝陽小学校校長) トライアルを5年生で行ったのですが、今までやってきたことが生かしたテストかなと思います。2年生が行うと小数は分からない。分数は分かるけれど、意味は十分わかっていない。あるいは、そもそも語彙力が十分でないかもしれないというもあります。では、どの学年がふさわしいのかという話は悩みます。何年生でならば適切かというところまでは言い切れません。

(飯塚市長) 杉谷教育長。

(杉谷教育長) やっぱり見えてきたものを次の指導に生かすときにはたぶん、分数のところが2年生なら、2年生の授業は、こんなふうにしていかないといけないことは見えてくる。できるだけある程度いろいろなことが見えてくる学年で行った方が効果的かなと、お話を聞いて思いました。

(飯塚市長) 私も全く同じように思っていました。児童生徒の状況もありますけれど、分数の例を取ると、おっしゃったように、続く子どもたちが同じところでつまづかないようにということが、次の段階、次の段階と溜まって行って、指導に繋がっていくのかなと、私もちょっと感じたところです。それによって、どんどん解消される、教育、指導に繋がっていくのかなと思います。先生の話の中で、個々への指導と学習集団の指導ということで、分数見ても2年、3年、4年、5年でも行っている。2年生、3年生のことが理解できなかったのなら、個々にはそこに教えていくのだけれども、学習はどんどん進んでいくということで、たぶんその辺の指導とか支援が非常に難しいなという話だったと思います。進んでいくところと、フォローアップしていくところのバランス、そういうことが指導される中で、このテストした後に、どう繋げていくかということが非常に重要かなと思って聞かせていただきました。

(山本朝陽小学校校長) たつじんテストと全国学調のような系統立てたテストと併用していくことが効果的かなと思います。そのつまづきにアプローチするため、全国学調のようなテストで、結果を分析してアプローチしていく。それを支える基盤は、ここは弱いからということで、組み合わせていくことが一番いいのでしょうか。たつじんテストを行ったから分からなかった単語だけを教えたとしても、それは意味がない。そうではなくて、概念と

して不足しているのであれば、それをどう付けていくかということまでやっておいて、学年ごとにきちんと行っていく。学調のようなものとミックスして行っていくことがいいのかなと思います。

(飯塚市長) 高橋委員。

(高橋委員) 新しいことをすると、やはり費用もかかってくると思うのです。今年に関しては出雲市が負担していますか。

(飯塚市長) 杉谷教育長。

(杉谷教育長) 今年は、県が全部負担して、希望校に対して行ったということです。来年はそういうふうにはいかないような新聞記事になっています。県の方にしっかり考えていただきたいと思っています。当然経費がかかる、それをどこが負担するかということについては、やっぱり私どもとすると、県学調の代わりにやるということであれば、県でしっかり見ていただくことが必要なのかなと思っています。ただし、新聞記事の書き方ではちょっと違っているので、どうでしょうかとは、と思っています。

(飯塚市長) 高橋委員。

(高橋委員) もし県が、全額は無理ですということになると、市はどうなのでしょう。何とかありますでしょうか。

(飯塚市長) 県がやらないということであれば、市でということになれば、先ほど先進地になるという話もありましたので、そういう思いを踏まえて、そういうことを踏まえて、県の方針もはっきりわからない状況です。それも踏まえて対応させていただきたいと思いません。最終的には県から方針を示される。今、費用負担も決まっていないということです。今後は、どうなるのかということだけ、教えてください。

(杉谷教育長) 具体的な要綱などは、まだ何もありません。こういうことをしていきたいという話は教育長会であっています。意味あるものだなということで、私どももそれには賛同しているということです。具体的にこうしますということもはっきりと伝えられていないので、求めていかないといけない。時期的に急いでもらわないといけないというところがあります。繰り返しになりますけれど、県学調の代わりであれば、県で負担されるものではないかということで私ども意見を言っているところです。最終的に早く出してもらうよ

うに、努めているところです。

(飯塚市長) それでは時間となりましたので、今日は山本校長先生、いろいろとご意見や、ご説明いただきありがとうございました。また引き続きいろんなところで教えいただければと思います。よろしく申し上げます。それでは、事務局お願いいたします。

(栗原教育政策課長) たくさんのご意見ありがとうございました。我々事務局も、県の動向も見ながら、取組を進めて参りたいと思います。終わりになりますが、教育長がご挨拶申しあげます。

(杉谷教育長) 本日は、飯塚市長と伊藤副市長、参加いただき、本当に時間いっぱい、議論させていただき、ありがとうございました。学力の育成ということで、新しい事業となるこのたつじんテストについて、皆様どういう考えなのかということやら、そういう中での懸念や、まず、やらないといけないところということで、今日、たくさんのご意見をいただいて、本当にそうだなということを思ったところです。子どもたちのためになるのであれば、私どもも、ぜひこれを活用していきたいと思っています。途中で申しましたけど、どうせやるのであるなら、出雲市が頑張って、他をリードしていくぐらいの気持ちでやらないと、実質、役には立たないのかなと思っています。そういう中で、今日いただいた意見等を踏まえ、県の方から最終的に示されたものについて、検討して進めたいというふうに思っております。今日は、いろいろご意見いただいたことに感謝をして、終わりの挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

(栗原教育政策課長) それでは以上をもちまして、令和6年度第2回総合教育会議を終了いたします。長時間にわたりありがとうございました。

(5時4分 終了)